

差別のない明るい町を

進路保障

支える・つなぐ23

その1

困窮の若者育てる理由

昨年の読売新聞9月4日号の「支える・つなぐ」欄に鈴木晶子さんが、標題のことを提言されていたので、全文をご紹介します。

しかし、受け入れてみると、彼女は多くの困難を抱えていました。笑顔がなく、あいさつができない。生活が不規則で遅刻が多く、食事を十分に取らず貧血で倒れることも。国語や数学の基礎学力が不十分で、仕事の指示を理解できない。技術を学ぶ以前の基本的なことが身についていません。

そこで社長は、高校の教師や私たちのような地域の支援者の力も借りて、日常生活や学習のサポートを得て勤務できる応援体制を作りました。彼女は、生活リズムの整え方や食事の作り方の指導を受け、小学校の内容から学び直し、今は資格試験を目指しています。

美容室も激戦の時代です。「厳しい経営環境なのに、なぜそこまでしてくれるのでですか?」。そう尋ねるのは自分たち中小企業。そして、地域に根付いて担ってくれるのは、むしろ、経済的に困窮した家庭で育った若者たちなのではないか。自分たちが若者を育てなければ、地域が衰退する」と、思いを語ってくれました。

『評』零余子は山芋や長芋などの葉のつけ根に生じる暗褐色の玉芽で、これを焼き込んだ御飯が零余子飯である。「ふつふつと噴き上げ初めしは料理にも造詣の深い作者が友人の来宅の時間に合わせて焼き込む零余子飯。これが本当のおもてなしの心であると思う。』

市人権推進課（教育庁舎1階）
TEL 32・2122
FAX 33・3525

地域で若者の夢を支えている社長さんがいます。美容室を経営する30代の社長さんは、美容師になりたいのに進学費用がなく、夢を諦めようとしている高校生に出会いました。そこで社長は、彼女を在学中から実習に受け入れました。そして、卒業と同時に正社員として雇つたのです。「ここで腕を磨きながら、美容師の免許を取ればいい」。とこどん支える覚悟でした。

参考・引用文献

「読売新聞」

2013年9月4日(水)号

市民文芸 花みづき歌壇（29） 松並武夫・選

ふつふつと噴き上げ初めし零余子飯友来宅のとき迫りくる

江田町 吉見 民子

雨霧らう日にかかり來し間違い電話

田浦町 西 照子

一等になるから来てねと指切りせし六歳児は

立江町 湯浅かや子

図書館で何気なく手に取りし本

抱きて帰る秋の夜のため

江田町 深田 伴子

一年をこの日のために成長し高々と咲く皇帝ダリア

田浦町 太田カツミ

畠隅に夫婦案山子の横倒し破れし衣が風にあおらる

立江町 樟 ツギエ

商店の上手な声につい乗りて気付けばみやげ両手に重し

赤石町 田原トシ子

九十歳まで元氣で頑張るから待つてね

曾孫に笑顔で卒寿の誓い

中田町口一ズガーデン 松本コフミ

渋滞に巻き込まれた朝の路事故車に免れスマホする女

立江町 品岡 和美

付き添いのなれば外出不能なり窓の向こうは今日も青空

神田瀬町 小寺 雍子